

◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第6回/アンリ・ラパン(後編)

Residence of Prince Asaka 1933—

朝香宮邸が竣工した1933(昭和8)年、60歳となったアンリ・ラパンはデザイナーとして円熟期を迎えていました。ラパンがデザイナーとしてもっとも輝いた1925年の博覧会を機にアール・デコ様式は全盛となりましたが、一方でル・コルビュジエを中心に、新たなモダニズムのデザインが早くも台頭し始めていました。装飾自体がその必要性を問われ、素材やフォルムの美しさ、さらには機能性を重視したデザインが広まっていったのです。そのため朝香宮邸が建てられた1930年代には、アール・デコの主流派デザイナーとされていたラパンのデザインも20年代と比べて装飾が抑えられ、より洗練された様式になっていたといえます。

ラパンが手掛けた朝香宮邸の計7部屋は、「大客室」「大食堂」など主に来客をもてなす場として使用されました。ラパンは柱による垂直な線、小壁の水平線を基調に簡潔な室内構成を行い、



図1

そこに各部屋ごとに異なる素材を用いてそれぞれ個性ある室内に仕上げました。なかでも、「大広間」のウォルナット材、「大客室」のシコモール材、「小客室」のペロバ材、「書斎」のシトロニエ材など西洋原産の木材を多用していることが朝香



図2

宮邸の特徴です*。それらは暖かみと落ち着いた雰囲気醸し出し、ラリックのガラス・レリーフやシャンデリア、ブランショの壁面レリーフなどの装飾を引き立たせています。それに対しラパンは「次室」を、アール・デコ本来のきらびやかさをもった象徴的空間としてデザインしました。朱色の人造石による壁はプラチナ箔が蒔かれ、艶やかな黒い柱には漆が塗られています。その中央に立つのはラパンがデザインしたセーヴル焼きによる白磁の室内用噴水です。上部の渦巻き型には電球が仕掛けられ、その間から細く水が流れ落ちる仕組みとなっています。

さらに、ラパンは壁画においてもその才を振るいました。大食堂、大客室、小客室の壁画は、ラパンが実際に筆をとったもので、どれも庭園風景がテーマとして描かれています。この花と水の豊かな庭園こそが朝香宮邸の装飾に共通するテーマでもあり、それが現在もこの建物が人々に親しみと安らぎを与えている所以なのかもしれません。1939年、66歳で亡くなったラパンの晩年の評価は必ずしも高いものではありませんでした。しかし、ラパンはその評価を覆す重要な仕事を日本に残していたのです。(岡部)

図1. 次室・香水塔: この作品は室内用の噴水として製作されましたが、妃殿下が香水を用いて香りの演出をしたことから後に「香水塔」と呼ばれるようになりました。

撮影: 布施善美 1933(昭和8)年頃

図2. 大食堂の壁画(油彩、板)は今年度、洗浄・修復を行い、現在の建物公開で竣工当時の瑞々しい色彩を披露することとなりました。

*木材の名称は「朝香宮邸新築工事録」の記述に従った。

- ・ウォルナット(Walnut): 欧州産クルミ材
- ・シコモール(Sycamore/Sycamore): 欧州産カエデの一種、シカモア材
- ・ペロバ(Peroba): 南米産キョウチクトウ科の一種
- ・シトロニエ(Citronnier): インド原産セダン科のマホガニーの類の高木